様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：２５４０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０３３２５

研究課題名（和文）第二次世界大戦における連合国間の協力と限界

研究課題名（英文）Cooperation and its limits among Allied States during the Second World War

研究代表者
西田　竜也（Nishida, Tatsuay）

広島市立大学・国際学部・准教授

研究者番号：８０５８９０２８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、集団防衛同盟が発展した要因を、第二次世界大戦中の米国、英国、ソ連による大同盟と連合国間の統合司令組織が発展したプロセスに焦点を当てて究明することを、主な目的として概要以下の成果が得られた。
　まず、米英を中心とした連合参謀本部（Combined Chiefs of Staff: CCS）の設立プロセスと、CCSの下連合国の軍隊が統合された態様を明らかにできた。特に、欧州での連合国間の協力と統合司令組織の成立につき情報を得ることができた。他方で、太平洋地域での連合国軍の間の協力と統合については、時間的な制約もあり必ずしも十分な成果を得ることができなかった。

研究成果の概要（英文）：　Focusing both on the process of forming the Grand Alliance among the US, UK, and USSR, and the advancement of the integrated command among Allied States, this research principally aims to explore factors promoting a multilateral collective defense alliance. The exploration has succeeded in finding the following:
　First, the research has discovered how the US and UK has developed and built the Combined Chiefs of Staff (CCS) and has demonstrated how Allied States forces were integrated under the CCS. In particular, the investigation has enabled to obtain vast amounts of information both on Allied States cooperation and the development of the integrated command.

研究分野：国際安全保障

キーワード：国際関係　安全保障　外交

１．研究開始当初の背景
（１）先行研究は、集団防衛同盟が成立し発展した要因に関する説明を十分果たしておらず、米国や英国の一次資料を活用したマルチ・アーカイブ調査を実施することで、本研究の意義は一層高まることが期待された。
（２）申請者はこれまで、冷戦初期に欧州では北大西洋条約機構（NATO）が、統合司令組織の下加盟国の軍隊を統合する多国間の集団防衛同盟を発展させることに成功したのに対し、アジア太平洋地域では成功しなかった要因を明らかにし、この成果を活用することを想定した。

２．研究の目的
（１）本研究の目的は、加盟国間の協力が高度に実現した集団防衛同盟が発展した要因を、第二次世界大戦中の米国、英国、ソ連による大同盟と連合国間の統合司令組織が発展したプロセスに焦点を当てて、究明することにあった。
（２）本研究では特に、集団防衛同盟の成立要因をより深く分析するために、１）第二次世界大戦中に米英を中心として設立された連合参謀本部（Combined Chiefs of Staff: CCS）がどのように設立され、CCS の下連合国の軍隊がどのように統合されたか、２）欧州では CCS の下で行われた連合国間の協力が統合司令組織の成立にどのように関係し、影響をもたらしたのか、３）さらに太平洋地域での連合国軍の間の協力と統合の実態を明らかにし、どの程度統合司令組織の発展がみられたかを明らかにすることを意図した。こうして、集団防衛同盟の成立要件という、従来では検討されなかった観点から史実を見直し、問題の解明に取り組むことを目的とした。

３．研究の方法
（１）本研究は 1939 年から 1945 年までの連合国の外交史及び軍事史を主要な対象とするので、アーカイブ調査が中心となった。
（２）そこで、まず第二次世界大戦中の大同盟（Grand Alliance）及び連合国側の統合司令組織の発展プロセス全般につき、歴史的経緯と事実関係を中心に調査を行った。具体的には、公刊されている文献・資料を収集し、そして、大同盟と統合司令組織の発展に最も重要な影響を与えたと考えられる米国で現地調査を行い外交・軍事文書の収集を行った。その上で、調査結果を踏まえ、欧州戦線及び太平洋戦線での統合司令組織の発展プロセスの解明に取り組んだ。
（３）さらに、新たな資料・データの収集が必要になったことから、米国への追加調査を行った。
（４）以上を踏まえ、本研究の成果は順次、論文や学会で発表した。

４．研究成果
（１）27 年度は基礎段階として、１）米国、英国とソ連による大同盟成立経緯と運用の実態、２）1939 年から 1945 年にかけての米英間の軍事協力とその協力が連合参謀本部（CCS）、そして、連合国の統合司令組織へとつながる過程、そして３）太平洋戦線での米英間の軍事協力の実態と司令組織のあり方につき、事実関係を中心に調査を行った。具体的には、まず第二次世界大戦中の大同盟の成立と運用、そして連合国の統合司令組織の発展経緯に関する歴史学、政治学、特に国際関係理論の文献、及び米国政府刊行の外交・軍事文書、政策決定者の回顧録資料を収集し、分析を行った。　その上で、2015 年 9 月 2 日から 17 日にかけて、米国メリーランド州にある米国国立公文書館、およびニューヨーク州にあるルーズベルト大統領図書館でアーカイブ調査を行った。国立公文書館では、米国政府の外交・軍事文書のうち、大同盟の成立と運用、そして連合国の統合司令組織の発展経緯に関する資料の把握と確認、そして、ルーズベルト大統領図書館では、ルーズベルト大統領の第二次世界大戦の欧州戦線と太平洋戦線における戦略や政策に関する文書の存在と内容を確認した。
（２）平成 28 年度は、米国での公文書館等で収集した文書や資料の情報整理と解析に多くの時間を費やし、米英ソの戦略や米英ソ間の協力のあり方がある程度見えてきた。具体的には、米国の欧州戦線及び太平洋戦線でのそれぞれの戦略とその相違や、米国側から見た米英ソ間の軍事協力の実態と運用、特に、米英間の連合参謀本部（CCS）の設立経緯と運用プロセス、そして米英とソ連の間の協力のあり方につき、概要を一定程度明らかにすることができた。中でも、第二次世界大戦中の欧州戦線につき、北アフリカ上陸作戦（Gymnast）、ノルウェー上陸作戦（Jupiter）、北フランス上陸作戦（Round-up）、限定的上陸作戦（Sledgehammer）等が検討され、結局北アフリカ上陸作戦が選好された理由や経緯を把握できてことは大きな成果であった。そして、その後のノルマンディー上陸作戦で端的に示されたように、数十カ国の軍隊の統合と統合司令組織の設立に結びついていくが、この設立プロセスについても特に米英間の間で紆余曲折を経ながらも、これまでにはない大規模での協力に結び付いていく姿が一定程度把握することができた。また、英国の第二次世界大戦戦略や英国が CCS の設立に期待した目的などを、既存文献や公刊された外交文書等を可能な限り網羅することで、一定程度明らかにすることができた。加えて、大同盟の成立に英国が果たした役割とその関与の度合い、CCS で英国が果たした役割と貢献、アジア太平洋戦線での英国の戦略と政策選考の概要が把握することができた。
（３）最終年度である平成 29 年度は、夏に米国の国利公文書館において、追加調査として米国側の詳細かつ膨大な資料を数多く収

集することができたこともあり、米国側の立場からCCSがどのように設立され、ワシントンDCでCCSの機構がどのように発展し、英国側との協力がどのように進んでいったかにつきある程度明らかにすることができた。こうして、集団防衛同盟の成立要件という、従来検討されなかった観点から史実を見直し、問題の解明に取り組んだことで、統合司令組織の成立と発展プロセス、中でも欧州戦線における統合司令組織の発展過程を一定程度分析することができた。その一方で、米英ソ間の協力関係の本質がどのようなものであったか、また、太平洋戦線における米英間の協力がどの程度進んでいたかは、十分詳細かつ有効な資料を入手することに限界があり、必ずしも十分明らかにすることはできなかった。また、米国側の資料が膨大に上ったこともあり、本年度末に予定していた英国での調査を行うことができなかったことは残念であった。

（４）こうして本研究が目的とした、１）第二次世界大戦中に米英を中心として設立された連合参謀本部（Combined Chiefs of Staff: CCS）がどのように設立され、CCSの下連合国の軍隊がどのように統合されたか、２）欧州ではCCSの下で行われた連合国間の協力が統合司令組織の成立にどのように関係し、影響をもたらしたのか、３）さらに太平洋地域での連合国軍の間の協力と統合の実態を踏まえ、どの程度統合司令組織の発展がみられたかを明らかにすることの３つの目的のうち、１)、２）については一定程度達成することができた一方で、３）については十分な情報と資料を得ることに限界があったこともあり、今後の課題とすることとしたい。

【引用文献】

A. J. P. Taylor (1991) *The Origins of the Second World War*, New Edition (New York: Penguin)
Winston S. Churchill (1986) *Second World War,* Reissue Edition (London: Mariner Books)
B.H. Liddell Hart (2011) *History of the Second World War* (New York: Pan Publishing)
Mark A. Stoler (2000) *Allies and Adversaries: The Joint Chiefs of Staff, The Grand Alliance, and U.S. Strategy in World War II* (Chapel Hill, North Carolina: The University of North Carolina Press)
Tatsuya Nishida (2009), *Incomplete Alliances: A Comparative Analysis of the Hub-and-Spoke System in the Asia-Pacific* (Ph.D. Dissertation, Harvard University)

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 西田竜也、欧州防衛共同体の意義と限界～集団防衛の観点から～、広島国際研究、査読有、第23巻、2017、23-42
② 西田竜也、同盟理論からみた日米同盟、法学新報、査読無、第 123 巻、2017、181-209
③ 西田竜也、アイゼンハワー政権のアジア太平洋地域戦略と同盟政策～西太平洋集団防衛システムの構想～、広島国際研究、査読有、第22巻、2016、17-36
④ 西田竜也、集団防衛同盟としての西欧連合防衛機構（WUDO）の意義と限界～英米の戦略的視点から～、広島国際研究、査読有、第21巻、2015、13-31

〔学会発表〕（計１件）
① 西田竜也、WUDO、EDC、WEUそしてNATO ～冷戦初期の同盟形成について～、日本国際政治学会2017年度研究大会、2017年

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
西田竜也（NISHIDA, Tatsuya　　）
広島市立大学　国際学部　准教授
研究者番号：80589028

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

**(3)連携研究者**

(　　)

**研究者番号：**

**(4)研究協力者**

(　　)